

古事記に学ぶ その 24
仁徳天皇の時代

2026年12月から読み始めた「古事記」は、いよいよ「下巻」に突入し、仁徳天皇の時代に入った。
本文の終わり(425 頁)まで、残り110頁ほどになり、完読できそうな感じがしてきた。
「古事記に学ぶ その 22」で触れたように、第15代応神天皇の後を受け継いだのは、中日売命(なかひめのみこと)との間に生まれた大雀命(おおさざきのみこと)で、仁徳天皇と名乗った。(16代天皇)

<1> 仁徳天皇の系図

大雀命(おおさざきのみこと)は難波(なにわ)に高津宮(たかつみや)を造って、國を治めた。大阪の谷町筋と松屋町筋に挟まれた台地の上にあり、「高津さん(こうづさん)」として親しまれている。落語「高津の富(こうづのとみ)」の舞台となった場所としても有名。<https://yahoo.jp/WQ92yY>
仁徳天皇は、葛城(かずらぎ)の曾都毘古(そつびこ)の娘である●石之日売命(いわのひめのみこと)を妻とした。石之日売命はのちに太后(おおきさき)になる人である。

*閑話休題(「古事記に学ぶ その 13」に戻って)

8代孝元天皇と伊迦賀色許売命(いかがしこめのみこと)の間に生まれた比古布都押之信命(ひこふつおしのまことのみこと)と山下影日売(やましたかげひめ)の間で生まれたのが建内宿禰(たけしうちのすくね)。神功皇后の時代に大臣として活躍した建内宿禰の御子9人の内の一人が曾都毘古(そつびこ)である。

仁徳天皇と石之日売命(いわのひめのみこと)の間に生まれた御子は、●大江之伊邪本和気命(おおえのいざほわけのみこと)・●墨江之中津王(すみのえのなかつみこ)・●蜷之水齒別命(たぢひのみづはわけのみこと)・●男浅津間若子宿禰命(をあさづまのわくごのすくねのみこと)の四柱。
日向(ひむか)の諸県(もろかた)の君である●牛許(うしころ)の娘である髪長姫を妻として生まれた御子は、●波多毘能大郎子(はたびのおおいらつこ)・●波多毘能若郎女(はたびのわきいらつめ)の二柱。波多毘能大郎子は別名を●大日下王(おおくさかのみこ)、波多毘能若郎女は別名を●長日比売命(ながひひめのみこと)またの名を●若日下部命(わかくさかべのみこと)と言った。
これが、日下・日下部という地名や人名(姓)の始まりらしい。

また、異母妹の八田若郎女(やたのわきいらつめ)及び宇遲能若郎女(うぢのわきいらつめ)も妻としたが、この二人には子はなかった。

この天皇の御子たちは合わせて六柱いたが、大江之伊邪本和気命(おおえのいざほわけのみこと)がのちの天下を治めた。そして蜷之水齒別命(たぢひのみづはわけのみこと)・男浅津間若子宿禰命(をあさづまのわくごのすくねのみこと)が、そののちの世を治めた。

<2> 仁徳天皇の業績

この天皇の御世に、様々なものが定められた。

太后の石之日売命(いわのひめのみこと)の故郷の地名を元に「葛城部(かずらぎべ)」を定め、日嗣

の御子である大江之伊邪本和氣命（おおえのいざほわけのみこと）の養育に携わる者を「壬生部（みぶべ）」と定め、蝮之水齒別命（たぢひのみづはわけのみこと）についても「蝮部（たじひべ）」を定め、大日下王（おおくさかのみこ）・若日下部命（わかくさかべのみこと）についても「大日下部（おおくさかべ）」・「若日下部（わかくさかべ）」を定めた。

また、大陸から帰化した秦人（はたびと）を使役して、茨田（まむた・まんだ）の堤と穀倉を造り、丸邇（わに）の池や依網（よさみ）の池を造った。

さらに、河川の氾濫が多かった難波で、堀割を切り開いて水路を造り、「小椅（おばし）の入り江」を造成し、「墨江（すみのえ）の船着き場」を整備した。

*閑話休題（いくつかの地名について…）

「茨田（まむた）」は、現在の地図で確認すると鶴見緑地の周辺になる。寝屋川の北岸に広がる海拔1～2mの低湿地。「茨田」「横堤」という地名が残っていたり、細かな水路が刻まれていたり、地形図を見ていると、古事記の文章を思い浮かべることができる。<https://yahoo.jp/wDjyNv>

「小椅（おばし）」は現在の地図で確認すると、環状線の鶴橋駅周辺。駅の東側に東成区東小橋があり、駅の西側には天王寺区小橋町がある。<https://yahoo.jp/ykm6h9>

新羅の天之日矛（あめのひぼこ）から逃げてきた阿迦流比売（あかるひめ）が辿り着いた難波（なにわ）の比売碁曾社（ひめぐそのやしろ）は、至近距離の東小橋3丁目にある。

<https://yahoo.jp/PTNc2t>（古事記に学ぶ その23）

天皇がある日、高い山に登って四方を眺めていた時のこと、「民の竈から煙が上がっていない」ことに気がついた。人々の暮らしが苦しいのであらうと考え、「租税や賦役を三年間免除しよう」と決した。そして、自らも宮殿の痛みの修理もせずに耐え忍んだ。

それから三年、再び山に登って眺めて、民の竈から煙が立ち上っているのを確認して、租税・賦役を再開した。この天皇の御世を「聖の御世」と言った。

以上

*仁徳天皇を中心とした系図は、次号（「古事記に学ぶ その25」を参照）